伝えたい、伝統芸能の心

高森町伝統芸能連絡協議会会長　本田　研一

私が最初に中国大陸へ渡ってから、もう三十五年になります。

ここで中国大陸と表現するのは、私の癖でしょう。台湾で過ごした私は、中国の表現を台湾と分けて使う場合に、台湾の人達は中国を大陸と表現していたが、身についていました。

中国へ渡ったのは、映画の撮影とテレビの番組制作の通訳でした。まだまだ当初人々は人民服に暗い電灯と、文化大革命から抜け出せないそんな時期でした。

この撮影に三年の時間をついやしている間に、変化しているのが見えました。女性の服装が同一色の人民服から、柄の入ったシャツに変わりはじめました。そして私達が泊まるホテルには、日本製の缶コーヒーが並びはじめる頃から、急激な変化にさしかかります。

街角には瓦礫がうず高く積まれ、ビルの建築へ移行し始めた頃でした。しかも再訪した町々では、古いものは取り壊され、新しい建築物の中で、そんな時代でした。

私達の世代と父親の世代は、中国に対して一種独特の感傷ともいえるものを、持っていた様な気がします。中国との国交回復から十余年の間、日本の経済界の中心的な方々の振る舞いと言えるそのしぐさは、一種独特の経済を度外視した、なにか必ずや一つ一つに「すまなかった」そんな思いが有る気がしました。

▲台湾市街にて

国交回復から四十年。大都市に変貌してしまった中国。

私が最初に「伝統芸能公演」を意識したのは、当初での上海市郊外の農村でした。一時は文化大革命で無くなってしまった伝統芸能が復活、その喜ぶさまを見た時、共通する感情に感激しました。今では、民族衣装を着込んだ接待が目につくようになりました。

やがて私は「さだまさし・浜崎あゆみ・小田和正・布施明」他の中国でのコンサート通訳の仕事に就きました。それは上海、南京、重慶、成都、北京と、ほぼ中国の重要都市でした。その内何度か日本の有名な伝統芸能公演も、あわせてやりました。それらはいずれも友好色に彩られ、日本からも多くのファンが駆けつけました。

私が最初に海外公演を手がけたのは、台湾でした。当時まだ生まれたての商工会青年部が中心となった、高森風鎮太鼓保存会でした。それから四代目を過ぎ、高校生が中心となって編成された太鼓と神楽の中国公演をおこないました。

台湾各地を回り真に多くの方々から拍手をいただき、そしてグループをつくりわざわざ私達に会いにお越しいただいた人達。感激とその熱き思いに涙しました。

そのような台湾での経験と、大陸中国で開催する故郷の伝統芸能公演。台湾以上に緊張しのぞみました。

中国では、四地方を五年かけての公演活動をしました。有名アーチスト等のコンサートと違い、皆手弁当での訪中。そして新しく変貌する、上海等の街並みに圧倒されながら、あっとゆう間にすぎさった中国公演の旅でした。

台湾に比べて、ふれあいに欠けた中国の旅でした。五度の訪中ともに、日中関係が悪化しつつあるかその最中でした。上海市最大の目抜き通り、南京路で開催された催しは、何十万人もの人々を、舞台から離し日本人のみでの催しをしました。それは、何も知らずただ呆然として立ち尽くす人々の目に、どのように映ったのでしょう。